
懐古の扉（超短編集）

弥生 祐

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

懐古の扉（超短編集）

【Nコード】

N4442D

【作者名】

弥生 祐

【あらすじ】

筆者が大昔に書いた短編の作品集です。ジャンルは色々 どれも軽く読めるものばかりです 7/12完結！

運の女神（3分、コメディ）

『ハア、ハア……』

男は荒い息をついて、額から流れる汗を拭った。目の前にある黒い形をした箱。破壊のプログラムの前でどれぐらいの時間が経っただろうか。数分か？ 数時間か？ 時の単位が狂ってるように男は感じていた。

『くそ、手が震えやがる』

爆弾テロの予告があり、爆弾処理のエキスパートである男が一人、解体にあたっていたのだ。

『一体どちらのコードなんだ？』

赤と黒。どちらかのコードを切れば処理が終わる所まできて、男は悩んでいた。

デパートの地下に設置された時限爆弾。武骨に備え付けられた時計の表示は、爆発まで残り数分という現状を冷静に示している。

早く処理を済まさなければならぬ。だが仮に間違えたとしたら…… どれだけの被害がでるか考えた時、男の背筋は凍りついた。男の決断に数百人も生命が握られているのだ。

男は再び汗を拭おうとした。その時ふと自分の左手の薬指に残る指輪の跡に気がついた。選択を誤れば自分の命も一瞬に消え去る。

だが男には愛する家族、帰りを待つ女はいなかった。

まぶたを閉じれば鮮烈に甦ってくる別れた妻の姿。

『あなた聞いてよ』 駅前のパーラーの店員つたら、呼んでも来ないわ、愛想が悪いわ、イケメンはいないわ、ひどいのよ』

『……………』

自分が責任ある職務を果たしているというのに、パチンコ浸りになつて家業をおろそかにした女。

『あなた大変よ』 今月の生活費、あの店が持つてっちゃったのよぶん、ぶん』

『……………』

男は離婚した。別れて正解だつたと思っている。

しかし今まで過酷な職務を遂行して生きて帰って来れたのは、底抜けに明るかつたあの女が待っていたおかげではないか。そう男は思い始めていた。そう思い込みたかつた。

『あいつが幸運の女神だつたかもしれねえ』

チツチツチツ……………

無情に過ぎる時間の中で、男は愛した女を捨てたことを後悔し始めていた。生き延びる理由が欲しい。帰りを待つ女がいる、それだけで強くなれると。

『いや、まだ間に合う』

この危険な職務を成功させたなら、もう一度やり直そうと男は誓った。女の好きだった赤色のコードを切断することに決める。震える手つきで特殊ニツパーを構え、そして

『俺は信じる！』

《パツツ！》

切断した感触が指先から肘に、そして肩口へと向かう。そのあいだ、男は閉じたまぶたの裏で美しかった妻の幻を見ていた。お気に入りだった赤のワンピースに身を包んで、家で男を待つ姿を……

それは確かに昔にあった光景。決まって女は罰が悪そうに舌を出したものだ。

『ごめんね〜 今日も運は味方してくれなかったの〜』

爆発する刹那、男はパチンコで勝てたためしが無い妻を思い出していた。

運の女神（3分、コメディー）（後書き）

記念すべき1なるうでの公開作、第一弾
いわゆるブラックジョークな作品でございます。

不死者（3分、文学？）

雑多に賑わう大通り。行き交う人々は私に気づくと、同情や嫌悪といった感情を瞳の色に浮かべる。

幾重にも刻まれたしわと、私の瘦せこけた風貌が幽鬼さながらの印象を与えるのだろう。

浮浪者。乞食。敗残者。負け犬……

呼び方などはどうでも良かった、私は死ぬことだけを望み生きていた。この数十年の間で、己の命を捨てようとしたことが何度あったことか。時だけは無情にも味方になってしまっている。すでに何歳だったか覚えてもいない。

『ハアア……』

深い溜め息は後悔という二文字から紡ぎ出された吐息で、私は間断無く沈んだままの感情を表現する他の術すべを知らない。

かつては永遠の生命を望み、長く過酷な冒険の末に断崖の洞窟で不老不死の妙薬を手にしたものだが。いや、だからこそか、今の私が過去を振り返ってばかりいるのも。

誰でもいい。聞いて貰えるだろうか。そして教えてくれないだろうか。

私がどうすればよかったのかを。

平和な生活など嫌だった。小さな町で生まれ育った私は、成人を迎える頃には同世代の仲間のような、地道に働いて、結婚して、子供を作るなんて平凡な一生は送りたくないと考えていた。

そんな退屈な生活なんかより、広い世界に飛び出して生きたいと思っていた。だからそうした。一獲千金を夢見て、トレジャーハンターという冒険家になった。

幾つかの冒険を果たした私は、ある洞窟に不老不死の妙薬が隠されているという話を聞いた。手に入れたものには、不幸が訪れるというよくある噂と共にだ。

噂は信じなかった。すでにトレジャーハンターとして、それなりの世界的名声を得ていた当時の私は、何事にも冷静かつ沈着な性格だから平気だと、自分を奢っていたのかもしれない。

失敗という二文字とは無縁だと思っていたのだ。

今にして振り返るとあの選択自体が罠だったのだろう。

不老不死の洞窟の最深部、幾つもの危険なトラップをくぐり抜けた私は、ついにお宝の前に辿りついた。

【不老と不死を求める者。汝、選択を誤るなかれ……】

そんなことが刻まれた台座には二つの薬があった。

恐らくどちらか片方が本物に違いない。そう考えてどちらの薬を取ろうかと、私が思案を巡らせた時だった。

薬に触れてもいないのに、床下が抜けるトラップが突然作動して、私は咄嗟に片方の薬に手を伸ばした。

眼下に広がる無数の剣山に串刺しになる直前、私は不老不死になることを信じて、薬を飲み干した。

私の感は当たったと思った。何故なら全身を鋭い突起物で突き刺されても、私は死ななかつたからだ。

そして、それから数百年の時が流れ、現在に到っている。

どんなに肉体が老いて、朽ち果てても、立ちあがることも出来なくなっても、冥界の扉は私をいざなってはくれない姿で。

どうして私はあの時、不死の方では無く、不老の方を取らなかつたのだろう？ そうすればこうして無為に過去ばかりを振り返ることもないかと思うのだ。

だから誰か教えて欲しい。やはり私の選択は誤っていたのかどうか。

頼むから教えて欲しい。私の人生はどこから間違つたのかを。

懐古の扉（超短編集）

不死者（3分、文学？）（後書き）

今作は公開中の短編、【不老・不死】のプロトタイプみたいなものです。

見比べてみますと人称から描写の濃さから、違いが丸分りかも？

遺書（3分、駄文）

いつの頃からなんて、覚えてないよ。

気がついたら食事をとること…… 嫌になってた。
気がついたら食欲がわくこと…… 憎くなつてた。

僕は今、軽い。
軽くて、もろい。

心も体も、僕を形成する全てが、薄くて消えかけてる。

またたきの間にまぶたに映るのは、なんの影なんだろう？

小さい頃から、本ばかりを読んできた。

母さんは料理が嫌いで、レパートリーは少なく、上手でもなかった。
父さんは頑固で、自分勝手に、でも頑張ってた。

……だから体をこわして、会社もつぶした。

なにもない家になった。ただテレビだけがうるさく、つまらない家になった。

父さんと、なにを話せばいいか分からない。今までなにを話してきたのか、分からない。

ますます本ばかりを読んだ。静かじゃない家で静かだったのは、僕だけだった。

母さん、朝早いんだから、弁当はいらないよ。自分でおにぎり作って持っていくから。

おいしくなくても、おいしいふりぐらい、できるから。

母さんが帰ってくる。つかれて帰ってくる。父さんがお金を待ちくたびれてる。

夕食は外に行った。外で食べることで気をまぎらせたかったの？

父さんが文句を言う。味が良くても接客がなっていないとか、掃除が行き届いてないとかで、必ず文句をつける。どこに行ってもイライラ。家に帰ってもイライラ。

最初は止めてた母さんも、次第になにも言わなくなった。そして僕は外食に行くのが嫌になった。

おいしくないより、おいしい方がいいに決まってる。

ただ、そのことに意味を見出だせなかった。見出だせなくなった。

でも、食べなきゃいけないんだ。

明日のために、動くために。

仕事のために、生きるために。

僕はだから、社会に出て一人になったとき、食べることを放棄し

た。

体が動く最低限のスタミナでいい。
頭が働く最小限のエネルギーでいい。

だから、まだ生きてる。

どんどん削られてく体を自覚しても、なるべく食べずに僕は生きてる。

TVつければ食べ物扱い、美味しいと。
誰もが痩せたい？ だからダイエット？

疑問に思い、愚問に思う。

友人と会うときはマシだった。彼女と一緒になら、食事も嫌じゃなかった。

でも、駄目なんだ。

そのときは良くても、部屋に帰ると気持ち悪くて、全部トイレに流すんだ。

吐いて、吐いて、辛くて、辛くて。それだけで次に食べるのが嫌になるんだ。

誰か教えて、食べても戻さない方法を。
誰か教えて、食べても悩まない方法を

だんだん減ってく、僕の体。

どんどん消えてく、僕の肉。

気がついたら、匂いのない点滴に体を繋がれてた。

気がついたら、無理やり鼻から食事を流し込まれてた。

今はそんなに嫌いじゃない。でも食べないでいられるなら、それにこしたことはないと思う。

人間、水さえ飲んでれば、ご飯なんて三日に一回だけで体は動くよ。

充分、生きていられるよ。

そういえば今日で三日目だ。もう一日、チャレンジしようか。

それで消えるなら仕方ない。

それで無くなるなら、仕様がな

それは自然の法則。世の理。はみ出したのは、僕だから。

異質な存在はきつと、僕だから……

ある作家の休日（3分、その他）

デパート最上階にある、少し洒落たレストラン。いつものように窓際の席で、祐子は外を眺めていた。

『相席しても良いですか？』

祐子が振りかえると微笑みを湛^{たた}えた老人紳士が、向かい席の傍に立っていた。

『ええ どうぞ』

そう言いながら祐子は店内を見渡したが、他に空いてる席がある。承諾しながらも祐子は不可解に思った。

『この年になると奥の席は遠くての』

相変わらず笑みを絶やさないで答える老人。しかし祐子の目には足腰がしっかりして映る。

『（他に何か理由があるのかしら？）』

祐子は新鋭の小説家だった。日曜ともなれば、こうして窓の外を眺めながら、いつも小説のストーリーを想像している。

老人がウエイターを呼んでメニューを読み上げた。その量たるや成人男子と、ほとんど変わらない。

『もう食べることだけが趣味でしてな』

丁寧に折り目をつけられたスーツを着こなす老人は、そう明るく答えて食べ始めた。

『（……刑事さん。ううん、年齢からすると定年だし、探偵かしら？）』

手前にあるアイスティーを飲みながら、祐子は老人の一挙一頭を観察した。

『そのボーイさん、ワインを持ってきてくれんかの？』

店内は昼時を迎えたようで混雑してきている。少し遅れてウエイターがワインを持ってきた。

それなりに高価そうなワインをグラスに注ぐと、老人は祐子にも薦めた。

『いえ、結構です』

『まあまあ、そう言わんと、一人で飲むのも何ですから』

仕方なく一杯を頂くことにした祐子は、その想像豊かな頭で思考を巡らせた。

『（どこかのお金持ちの人かな？ でもそれならもつと高級そうな店に行くはずだし……）』

老人はワイン一本を軽々と空けると、満足そうに上品な口ひげを

揺らした。

『こんな老いぼれに付き合ったださって、ありがとうございました』
『ごちらこそ……ごちそうさまでした』

丁寧に頭を下げてきた老人は、そのまま自分の勘定書きと祐子のもので手を伸ばしてきた。

『せっかくですじゃ、ここは払わせてください』

勿論、断ろうとした祐子だったが、優しく真摯な老人の迫力に押しされ、好意に甘えることにした。

『（そうね。きっと奥さんを先立たれて、寂しい生活を送る人なんだわ）』

そう結論づけて祐子は席を立ち、店を後にすることにした。

『はあ、やっぱり小説に使えそうな面白いネタは、そうそう無いわよね』

エレベーターの前で自嘲気味に呟く。

そんな祐子の目に颯爽としたフットワークで階段を降りていく、先ほどの老人の姿が入った。

そして耳に店の方からウェイターの大声が。

『食い逃げだ！』

これは小説に使えるだろうか、と、また頭を祐子はひねった。

ある作家の休日（3分、その他）（後書き）

一度、何を思ったか推理ジャンルで公開、すぐに違う！と思い直し、
削除した作品です（汗）

光の中へ(3分) ドラマ(前書き)

小説家になろう未発表作品

懐古の扉(超短編集)

光の中へ（3分、ドラマ）

グオオ……ン！

渴いた音がアスファルトに響いている。

夜明け前、紫色に染まった湾岸道路を走りながら、男は運転席で無謀ともいえる走行を己に課していた。

タイヤを切りつけるようなドライビング。せまくなる視界。文字通り男はチープとっていいスリルに身を任せ、あるいは委ねていた。

大型トラックが深夜ということもあって、反対車線を猛スピードで走っている。

巨大な車体と交差する度に、男の愛車は見えない空気の圧力にふられ、ケツを振った。

男とて恐怖を感じないわけではない。だが去来する幾つかの感情が肉体を麻痺させ、怖れに対し無意識のバリアを張っている。

シフトを更に高速に変えるため手を伸ばす。その腕に見飽きた傷を見つけて、男は意識を過去への階段に向かわせた。

半年前、男は将来を約束されたレーサーだった。国内で連戦連勝を飾り、そろそろ世界に飛び出そうとしていた時、その事故は起きた。

更なる資金繰りの為、有数の車メーカーに融資を求め訪ねていた頃のことだ。男は某車メーカーの令嬢と知り会い、将を射るつもりで馬を狙っていた。しかし、本当の恋に落ちかけていた季節。

それを理由にするつもりは無い。だが結果として回りは女ボケで、それまでの男だったら考えられないような事故を起こしたのだと、批難した。

凍てつく風が吹き抜ける、冬。病院のベッドで意識を取り戻した男。傍らにいたのは所在無さげなチームの総監督だけだった。

医師の診断によると男の体はレースどころか、日常生活においても何らかの支障をきたすほどの重傷であり、それを聞いたチームの幹部連中は男に見切りをつけ、契約を白紙に戻した。

男が冠した称号はレーサーから半病人と移り変わった。それは愛した女との接点。組み上げたパズルが崩壊したことを意味していた。

ズキン、とひどく頭が痛み、男の視界がぼやけた。ハンドルを握る手にも震えが走る。

男は腕の痺れを自覚するものの、そのまま速度を緩めることなく、暗闇へと走った。

【とても無理ですよ、以前のように……】

リハビリ施設のインストラクターの声が、胸中に染み込んでいる。男とて知っている。自分の体なのだ。どうゆう状態なのかは熟知し

ている。

【脊髄が痛んでるんです、いつまた発作が起きるとも】

『うるさい、だまれ！』

分かっていたのだ。体を酷使うことなくあのまま引退をすれば、経験あるスタッフやTVの解説者といった安定した生活が送れたかもしれないことは。

だが男はそんな優しさに甘えなくなかったのだ。

『（……あの光の中へもう一度）』

サーキットで最高の走りが出来た時に、決まって出現する恍惚の世界を男は望んでいた。

それは自己の精神がこれ以上無く、研ぎ澄まされた時に味わえる天恵。

光の世界。その前では体の痛みなど、なにほどのことがあるつか。

男は再起を目指した。色あせ傷ついた夢を取り戻すためにも、愛した女に再び会うためにも、帰ろうと。

グオオ……ン！

車がうなりを上げる。男だけが叶えられる夢と、失った世界を取り戻すために。

爆走する車は、ただ、男が焦がれる光の世界へと、いざなっていくようだった。

獣 (S) ver (3分、ホラー)

男は夜の闇に溶け込み、血溜まりの中で感触を味わっていた。

指先から手首まで赤く染まった食べ残しを、丁寧に時間をかけて舐めている。

男は満足げに、のどを鳴らし目を細めた。

足元に横たわる肉塊は拳より一廻り大きいだろうか？ 赤水にひたたる僅かな黒髪が、人間だった名残を懸命に訴えているようだ。

パキッ

踏み潰れた骨の音は驚くほど軽く、切ない。だがそれも男の欲望を満たすものでしかない。

(まだまだ、まだ、足りない。まだ、欲しい)

低い声で己の渴望を訴えた男は、夜空に浮かぶ満月を見上げた。注ぐ光が地に映る影を作り、彼を飲み込む狂気を纏わせたのか。

男が禁忌たる行為を犯した最初の記憶は、社会人になってからだった。

人間社会に住まう者なら誰にも覚えがある、下級者の成功を妬み、引きずり、屈させる、慣習という名の制裁。

どんなに目を凝らしても見えない壁、不可侵の三角形に、男の心は徐々にひび割れ、壊されていった。

社会の底辺でしか自分が存在しえないことを悟った時、男の胸の内、もつとも単純かつ自然な黄金律、食物連鎖の頂点を目指す衝動が働いた。

初めての食祭は同僚の若い女だった。その弾力のある肌に犬歯を突きたて、溢れてくる血をすすった時の味わい。剥がれた皮膚の下、美しく流れる赤い血道。そして何より獲物の泣き叫ぶ声がスパイスとなり、五感を満たすことに気づいた。

月光に照らされた影が細く滑り出す。男は何かに憑かれたように走り始めた。無音の暗闇が支配するビルの合間を抜け、ひたすら走る。

(……！？)

住宅街に入った時、剥き出しにしていた皮膚が、男に危険を知らせた。気のせいではない。やはり誰かが追っている。

警察の犬が嗅ぎ付けたか？ それとも公安の奴か、まさか自衛隊ということはあるまい。

最近の乱行を振り返り、男は調子に乗りすぎたかと耳元まで口角をねじり上げた。

まだ捕まるわけにはいかない。男は再び走り始めた。閑静な住宅街を抜け、今度は緑林公園の中へと駆け込む。

まだ逃げられる。男は自分の力を信じていた。食人という禁忌の行為を重ねたことで、自分が特別な生き物だと思えていた。

脳裏を横切った直感、ざわめきたつ四肢を鼓舞して、男は茂みの中に飛び込んだ。

自分は人を超越した捕食者なのだ、捕まるわけがない。男は小枝を踏みしめて、低く、速く、鋭く、駆け出し始めた。

《クククツ……》

男の舌に、あのとろけた甘美な人肉の味が甦る。

《クククツ…… クカカカツ……》

やがて大きな池のほとりに辿りついて、男は深くも荒くも無い息を吐いた。のどに強烈な渴きを感じ、池の水で潤そうと水面に近づく。

(……???)

微かに揺れる月面の下、そこに映った自分の顔を見て、男は石のように体を強張らせた。輪郭は臃気だったが上下する肩と月の間には、自らの象徴である顔が、くつきりと映っていた。

(コ……レ、オ……レ?)

自分を探す物音が聴覚を騒がしても、男は静止したまま、うつむき続けた。かつて見たのは、いつだっただろう。そんなに遠くない

昔、男がまだ人間だったころ。その整った顔立ちは異性の気を引き、光を放っていたはずだった。

雑多な警官の気配が辺りに充満し、男を取り囲む輪は狭くなっていく。それでも微動だにせず、濁った瞳に映る自分を、狂気の手を浮かべて、男は眺めていた。

かつて見たのは、そうだ、年下の同僚に誘われ、待ち合わせた店先の窓。そして、その後、男は……

……男はもう、人の姿では、有り得なかった。

獣（S）ver（3分、ホラー）（後書き）

今作には描写や表現を加筆した、獣（H）verもあります。よろ
しかったら比較してみてくださいね（

天国への道程（3分、その他）

流れる青空は澄んで美しいものだったが、今の俺にはそんな景色を見ている余裕はない。後ろを振り返れば悪鬼の如き形相をした奴らが、群れをなして追いかけてきているからだ。

グガアア！！

赤茶けた肌の色。血走った目。やつらの姿は小さな頃にお婆ちゃんが語ってくれた、昔話に登場する地獄の鬼のようだ。

（まさか奴らに捕まったら、地獄に連れて行かれるのでは？）

俺は恐怖に包まれながら必死になって上へと進んだ。ふと見下ろすと、長年住んでいた街が米つぶのようになっていた。

そう俺は今、水の中のように大空を泳いでいるのだ。

（ん、待てよ。ということは、これは夢か？）

そういえば何だか体もふわふわしており、実感が無い。

グガアア！！

（あの鬼の唸り声も夢なんだろうか？）

しかし俺の中の第六感、いわゆる本能というやつが、あの角が生えている奴らは危険だと告げている。

『ええい、ままよ！』

俺は自分の勘を信じてピッチを上げた。だが鬼達もしぶとく食らいついてきて離れない。

『くそ〜、こうなったら死んでも逃げて……や、る？』

そう吠えた瞬間、何故こんなところで鬼ごっこをしているのか、俺は思い出した。

（そうだ、俺は事故にあって死んだんだ）

病院のベッドの上で今際に見た映像。先に逝くことになって、両親に申し訳ない気持ちで一杯になりながら、天国を目指し上っている、俺はその最中だったのだ。

（なら尚更、天国に行かなきゃ申し訳が立たねえ！）

俺は今まで以上に空を掻く手に力を込めて、白い雲の中に踊りこんだ。

ガシツ〜！

『うっ！ 足が！？』

奴らのひとりに両足を掴まれた。それでも構わず俺は雲の上に飛び出すためにもがいた。そして奴らから脱することに成功した。

『やあ、おめでとう！ これぞ君は天国行きの切符を手に入れる資

格を
』

どこか抜けた声が俺の頭上で響いた。その声の持ち主は頭の上に輪っかがあるところを見ると、天使のようだった。

『ありやく、君は地獄の鬼から逃げきれなかったみたいだね』

天使はやれやれ、といった感じで両の手のひらを腰で広げた。

『たまにいるんだよね、こうゆう半分だけ逃げてきたって魂がさあ』

『そ、そんな、それじゃ俺は地獄行きなのか』

『いんや、君みたいな人は幽霊になって現世に戻って賣うことになつてるんですよ』

俺は良く理解できず、もう一度詳しい説明を求めた。

『だからね、君は足を鬼に取られちゃったでしょ。昔から幽霊は足が無いって決まってるじゃあ』

天国への道程（3分、その他）（後書き）

あるSSを^{ショートショート}手本に書いた作品（未公開）

今、読み直すと一発オチなだけですね（苦笑）

東京発、大阪行き（3分強、恋愛）

東京発大阪行き、18時30分発……

自分が乗車する電車がそれだ。あたしは二度と来ることがないであろう、この東京の街を振りかえった。

闇に染まりかけた夜の東京駅。乗車口に向かう間にも、恋人だった祐次が今もこの街のどこかにいると思うと胸が切なくなる。

あんとなら、いつ死んでもかまわへん。

かつて祐次に言ったその言葉に嘘はなかった。でもあたしは今、大阪行きの新幹線が待つホームへと足を進めている。

（大丈夫や、失恋すんのは初めてやないやろ）

そう自身に言い聞かせても、東京の空は悲しい色であたしを送った。

（いつか、また来れるんやろか？ あたしが本気で惚れた男の生ひとまれた街。そしてあたしの二十代の大半を捧げたこの街に）

電車到着のアナウンスが構内に響く。あたしの心はまだ東京の街中でさまよい、抜け出せないでいた。

大学卒業と同時に仕事のため出てきたこの街で、あたしは年下の祐次と知り合い恋に落ちた。好きになつた理由は分からない。夢ば

かり見ていた、その瞳に心を奪われたのかな。裏表のない純粹な性格に惹かれたのかな。

気がついた時には頭の中に、いつも祐次の姿があった。

一年、二年、三年と瞬く間に時は過ぎた。イラストレーターと言えは聞こえはいい職業だけど、祐次は駆けだしの方で、二人の時間が上手く作れなかったね。でも幸せだった。幸せであれば、あるほどに。

なかなか仕事で芽が出ず、一緒に暮らした生活は決して楽なものではなかったけれど、祐次はあたしに本物の愛を教えて、与えさせてくれた。なのに……

駅の構内に人が集ってきている。恐らく恋人同士だろうと思われ二十歳ぐらいの男女が、人目もはばからず抱きしめ合っていた。

もうすぐ電車がやってくるホームの中央で。あたしを故郷に連れていく電車を待つホームで。

（なんで別れたんやろ）

あたしが期待した言葉を、最後まで祐次は言ってくれなかった。想像の中で祐次は時期を計っていたようにも思う。けれど、あたしの環境はそれを許さなかった。

祐次との生活が五年を過ぎたある日、連絡もなく唐突に両親が上京してきた。ひとつの縁組を持って。

『なんで勝手に決めるんや、婿ぐらい自分で決めれるわ!』

『あなた、幾つになつたと思ってるん。大体、東京もんと』

『嫌や言つたら、絶対に嫌や!』

母さんとの話は平行線のまままで決着はつかなかった。

『あたし絶対に帰らんからね』

敵意をむき出しにしたあたしに、今度は父さんが落ち着いた静かな口調で問い掛けてきた。

『分かった。こつちもおまえに内緒で縁組の話、進めたんは悪いと思う。けどな、このまま、その祐次君の仕事が軌道に乗るまでつちゆうのはあかん』

それはあたしも胸中のどこかで思っていたことだった。

『だから半年や、今のまま半年たつても、祐次君に芽が出んようなら別れて帰ってこい』

『なんでや? そんなん父さんに関係あらへん』

『……なら、このままでいいんか?』

咄嗟に返答に窮した。

『そこまで自分が惚れた男やつたら信じてみいや』

まるで逃げ道を塞ぐような父さんの提案は、でも正論で断れなかった。

『分かった、でも祐次に聞いてからや』

そう防波堤を作るのが精一杯だった。彼なら強引な両親を、上手く説得してくれると思っていた。

『そうだな。俺も今のままじゃ駄目だと思っていた。分かったよ半年の間で』
『なのに、祐次は承諾した、してしまった。』

電車が近づいてくる。軽い振動が体を昨日じゃない、今日に戻させる。相変わらず抱き合っているカップルは、電車が着いても名残惜しい雰囲気をかもし出していた。

（こんなに好きなのに……）

カップルに触発されたみたいで、あたしの涙腺は緩んできていた。

排気音のように電車の扉が開いた。

（なんで、なんであたし、別れたんやろ）

今もまだ変わらず残る祐次への思いが、とめどない涙になって頬を伝う。

結末を迎えてから今日まで、泣いて泣いて暮らして、とうに枯れていたと思ったのに、涙は枯渇する気配も見せず、ただ流れ続けた。

あたしは最後にもう一度、かけがえのない男ひとと出会った東京を振りかえった。そしてそのまま、電車へと乗り込んでいった。

東京発、大阪行き（3分強、恋愛）（後書き）

歌詞をモチーフにした作品です。

うらん小説と呼べない気がしますね（汗）

巡りて叫べ！（2分、二人称）

これは誰もが通る道。生きとし生けるもの、その全てが……

貴方は覚えていらっしやいませんか、見知らぬ場所で横たわって
いたことを。

その好ましくない匂いが、貴方をそこはかとな不安に導いたこ
とを。

（……ここは何処？）

思い出しませんか。ここは乳白色に彩られた空間。一様に並ぶの
は貴方と同族。

（わたしは一体……誰？）

思い出せないでしょう。思い出せないでしょう。

何故ならそのとき貴方は、一切の記憶を無くしていました。

現在に至るまでの過去が脳裏から消滅しているのです。周りを見
渡しても、全ての物に関する記憶が欠落しているのです。

（何、何なの？）

怖いですか。名前すら覚えてないことが。

（分からない、分からない）

引き出そうとしても、努力という名のエネルギーは、ことごとく霧消しますよ。

（えっ、何で、わたし!?!）

気づきましたか。裸になっている自分に。

（うあ、あああ!?!）

逃げるのですか。一糸まとわぬその姿で。どこにも行けませんよ。精一杯、身体に力を込めても、その意志を肉体が受けることはないのです。

（ああ、あああ……?!）

ね、動けないでしょう。

（ああ　あああ!?!）

ふふ、縛られてるわけではありませんよ。

（分からない!　力の入れ方が、起き上がり方が分からない!?!）

おや、貴方にお迎えが来たようですね。立派な体格をした男性です。女性もいますね。

ほら男性の方が、貴方の顔を覗き込んで来ましたよ。

（こ、この人は誰？ 嫌だ。近づかないで、あっちへ行つて！）

駄目ですよ。声も、いえ言葉の発し方も、覚えていないでしょう？

（嫌だ、来ないで！ 何で、何で動かない、どうすればいい。やめ
お願い！ うあああ ああ、ぎゃあ ！！）

ふふ、そうですよ、貴方が最初に覚えたのは、呻くこと。

そして大声で泣き叫ぶこと。

そのことで貴方は、新たな自分の存在を知るのです。

『ほら、パパでちゅよ 元氣かな』

『馬鹿ね、まだ分からないわよ』

『おぎゃあ！ ぎゃあー！！』

ふふふ…… さあ新しい世界へ、いってらしゃい。

巡りて叫べ！（2分、二人称）（後書き）

今作は春野 天使先生が主催した二人称作品に参加した作品になります。

巡りて笑え！（4分、一人称）

どうして病院の室内というものは、こつも味気ないものなのだろうか。

どこまでも続く白い壁に白いカーテン、白いベッドに白い病人。

『ごめんね、いつもいつも……』

病室のベッドの上で、青白い顔をした母が軽く咳込んだ。父さんが失踪してからというもの、元気がなくなり、今では入院生活も半年になるうとしていた。

『祐次さんとはうまくやってるの？　くれぐれも私みたいになつたら駄目よ』

『大丈夫よ、安心して』

それは母に心配かけまいとする嘘だった。父さんと同じく夫の祐次も女好きで、もう十日も帰って来ていない。

『それならいいけど……　絶対に怒ったりヒステリックになつて、私みたいに別の女の所に行かれたりしちや駄目よ』

『こつちは平和にやってるわ』

笑顔で相槌をうちながら返事を返すが、母は習慣になっている言葉を今日も繰り返してきた。

『言い争ってる内はいいのよ、でも後から苦しむのは必ず女の方なんだから……』

耳にタコが出来るぐらい聞いている。けど、この話が無かったら、とつくの昔に別れてると思う。

わたしはそれぐらい、夫の祐次に愛情を失っていた。

家に帰ると、どっと看病疲れが襲ってくる。癒してくれる存在など皆無な、味気の無い空間。何のことはない、病院と同じではないか。

酔った祐次が玄関のドアを叩く。何とか一人分の食事を作ろうとしていた時だ。わたしは無視を決め込むことにした。謝っても今度ばかりは許すつもりなどない。

『ああ？ 俺はマジで惚れたんだ。おまえも少しは見習えっただ、つたく』

居間に入ってくるなり飛び出した祐次の言葉。

（また、出ていくつもりなの。ううん、それより比べるなんて……！）

わたしは、わたしは無視出来ず、逆上した。これでも我慢してきたつもりだった。けれど夫は謝るところか……

祐次は緩めたネクタイをソファーに投げ出すと、悪びれもせず座った。

『うむ、おい、水ぐらい持ってこい』

すぐ近くにいたわたしに怒鳴り散らす。いつもなら無言のまま用意する。けど今日は、今日のわたしの忍耐の限界は、すでに決壊していた。母と違い勝気な私は、浮気相手と出て行く男を、悔やんで生きる気など毛頭なかったのだ。

祐次の声を無視して背後に回る。解き捨てたネクタイを手に取り、汗で湿る首を絞めた。

「ぐっ、て、てめえ……」

ただひたすらに両の腕に力を込めた。脳裏を支配して産み落とす感情はただ一つ。

死ね。死ね。早く死んでしまえ。

ネクタイに掛かっていた爪先から、ゆっくり弛緩していくのが見えてとれる。アルコールのせいなのか、祐次は大した抵抗も出来ず、だらしなくソファアに埋もれた。

白目を剥いた夫　　だった男を見下ろす。それは拍子抜けするほど簡単なことだった。

困ったのが死体の処理、女の力では遠くに運べないし、それに誰が見ているか分からない。わたしは熟考の末、基礎に隠すことにした。さすがに居間や寝室では嫌なので、離れにある物置の床下を剥がして埋めることにする。

一日、二日と土を掘りつづけ、やっと三日目に大人がすっぽり入る穴を作った時、何かカチンという音がして、固いものが指先に触れた。石かと思いい拾い上げると、どうやらそれはネクタイのピンだった。

チカチカと頭の中で薄れていた記憶が、鮮明さを増してゆく。懐中電灯で辺りを照らす。予想通り、見知ったネクタイの切れ端が埋もれていた。それは、一年前に浮気相手と失踪したはずの、父さんが愛用していたネクタイだった。

どうやらわたしも、母と同じ道を巡ったらしい。

『ふふ、ふふふ……』

乾いた笑い声が床下にこもる。明度の悪い世界は何の色も無い。ううん、暗い闇色一つがあるだけの無音の世界。その中でわたしは一人、声を上げて笑った。

わたしも悔やむのだろうか。ふふ、あり得ない。それに、考えたくもない。

巡りて笑え！（4分、一人称）（後書き）

巡りてシリーズ？ もう一作の【巡りて帰れ！】は別に短編として
公開中

もうかりまっか（3分、詞小説）（前書き）

B'zの同タイトル曲『もうかりまっか』の歌詞をモチーフにした
ブラックコメディのつもりで書いた作品です。

もうかりまっか（3分、詞小説）

蒸し暑く寝苦しい夜には、決まって生暖かい風が入ってくる。

今夜の風も同じだ。ベッドに仰向けあおむになつて見る天井の染みは、薄いようできて、深く、黒ずんでいて、僕を奈落の世界へ導く夢魔の使いに見える。

《ブウウ……ン》

冷蔵庫のモーター音がやけに大きく聞こえた。

大丈夫、眠くない。今日は平気だ。今日こそ瞼まぶたは閉じない。閉じなければ見ることは無い。

不意に誰もいない筈の部屋に、自分以外の気配を感じた。

僕は布団を引き寄せくるまった。

徐々に温もりぬくが躰からだを支配していく。

（行かなければ良かったんだ）

心地良い熱うなに促され、全身から力が抜けてくる。

（駄目だ、寝ちゃ、いけ、な……）

けれど先月の旅行から持ち帰った疲労は、僕の明確な意思に逆らった。

（駄目……だ……）

結局、僕は母親に抱きつく赤ん坊のように身を固くさせ、連夜続いている恐怖の夢世界に転がっていった。

彼等は僕が張った見えないバリアを、いとも簡単に突破、あるいは無視してくる。

常に、常に、常に……！

『もうかりまつか？』

無遠慮に中年の男が声をかけてきた。

（……やっぱり）

分かってはいたが、これで何回目だろう。

『もうかりまつか？』

こいつは別の奴だ。

『もうかりまつか？』

（……………）

僕は俯き黙^{うつむ}り、足早にこの場を離れようとした。

やはり一夜目に調子に乗って、ぼちぼちでんぐ、とか、あきまへんわ、とか、答えたのがいけなかったのだ。

『だははははははっ！』

い、いきなり大きな笑い声が出た。

見ると怪しい豹の柄で全身をコーディネイトした、中年のおばは

んが僕の肩を叩こうとしている。
それを避けようとした僕は、いつの間にか大勢の人に囲まれている
ことに気がついた。

（な、何なんだよ）

戸惑う僕に構わず、一斉に笑い声を浴びせてくる。

『わははははー！』

『クスクスクス……』

『ぎやはは、ぎやは！』

『ププツ……』

（な、だから何なんだよ）

しかし僕の訴えはまるで効かず、連呼する響きは、まとわりついてきた。

（やめろよ、やめろ！ 何がそんなにおかしいんだよ！）

僕は呪縛をはねのけようと大声で叫んだ。

『まあまあ、こんなときゃ好きなように、やらしてくれる可愛い女
に会いたいね』

はあっ？ 意味が分からない。いや、きっと意味など無いに違いない。この街には不条理な法則、僕を相容れさせない力が働いているのだ。とにかく逃げなくては。とにかくここから逃げなくては。

だが、景色を群集に染めた人たちから、どうやって逃げればいいのか、
『もっかかりまっか？』

（だから唐突に入ってくるな！）

『祐ちゃん、どう思う〜？』
（僕は祐ちゃんじゃない！）

『笑いが止まりまへんわ〜』
（止めようとしてないじゃないか！）

心臓が痛い、張り裂けそうだ。 なのになのに彼等は密着してくる！

『しゃあないやんけ、とりあえず裏のお好みで、本日も朝まで行きましょか〜』

（嫌だ！ 絶 対に、嫌だ！）
前後左右を塞ふさがれ、もう口でしか拒絶することが出来ない。

『もうかりまつか？』
（やめろ！）
担がれて、空を飛ぶ。

『もうかりまつか？』
（やめてくれ！）
僕の目に有名な、あの川が映った。

『もうかりまつか？』
（う、うわあぁー！！）
そして僕は、かのケン ツキーのおじさんのように、泥臭さが待つ川へと投げ出された。

《ガバツ ！》

身を起こした僕は部屋を見渡した。

『はあ、はあ……』

慣れたカーテンを見つけて、息を落ち着かせようとする。先月の旅行から帰って、間もなく始まったこの悪夢。今夜も何とか現実世界に戻ってこれたらしい。

安堵の息を吐いた僕は気がつかなかった。

カーテンの陰に隠れた、食い倒れ人形が薄笑いを浮かべていることを……

もうかりまっか（3分、詞小説）（後書き）

なろう短編として公開した当時はコメディイと思ってもらえず、ホラーじゃないの？ との批評を受けた作品でした（苦笑）

ええと関西（大阪）にお住まいの方、あくまで勝手なイメージですので怒らないで下さいね m（――）（ m

虚ろな瞳（5分、ミステリー）

天井に程近い窓から、一筋の薄い帯光のようなベールが降り注いでいた……

中空にただよう細かな塵。人の気配さえ虚ろな静謐と静寂さを混在させたような室内。

部屋にある調度品といえば簡易ベッドとアルミ製の机、それに無数のファイルが収まる、飾り気を一切排した事務棚だけ。あくまで無味で味気のない空間。その中で一人、白衣の女が壁際に設置された机上のPCに向かい、カタカタとキーボードを叩いている。

一定の拍子を刻む律音の中、女が人の気配を感じて手を止めた。するとコンコンと扉を叩く音がして、一人の男が部屋に入ってきた。

『先生、また力を貸して欲しいのですが』

男の身体を包むコートは、長年、風雨を友としてきたように酷く汚れている。そんな装いを意に介すことなく男は鋭い目つきで女性に一礼した。

『貴方も毎日大変ね。それで今日はどんなことを？』

電子カルテだろう。難しい単語が表示された画面を横目に、女が振り向く。

『実はある事件の容疑者、なんですけど、この人物、取り調べ中に名前も職業も別人のふりを始めまして……』

険しいまなざしを女から逸らすことなく、男性は続けた。

『どうやら別の人格を持っているようなんですが、どうでしょうか先生。実際にそんなことあるんでしょうか』

白衣の女は軽く腕組みをして、小さな顎を床に向けた。丁寧にまとめられた後ろ髪が揺れる。

『いわゆる多重人格症かしらね。私の専門外ですから何とも言えませんが』

『その容疑者、自分を医者だと主張してるんです』

『へえ、私と同じ職業。面白いわ。今度ぜひ連れてきて下さい。私も多重人格について調べておきますから』

興味を覚えたような女を尻目に、コートの男は一つ深い息を吐いた。

『……先生、何か思い出しませんか？』

白衣の女は何を言われたか分からない様子で、細い首を傾げた。

『いえ、ならいいんです。また来ます』

消沈の影を背中に宿して、コートの男が部屋を後にする。

一人残された女は再びPCに向き直し、白衣に包まれた腕をキーボードに伸ばした。

淡い白色光の下、均等に並ぶ扉が続いている。扉に合わせて長く続く廊下。無機質さを強調する回廊の中で、コートの男は眉間を押さえていた。

『どうだね、彼女の様子は？』

私は背後からコートの男に声をかけた。

『駄目でした。まるで本当の医者よろしく、次までに調べておくと
言い出す始末です』

『仕方あるまい。大切なのは根気だよ、君。まあ、時間をかけること
とさ』

私は苦笑いを浮かべた。慎重に言葉を選びながら、男の様子を伺う。決して真意を悟られぬように。

『ええ、その通りかもしれませんが、また日を改めようと思います。
では、これで本官は失礼を』

コートの男が律義に敬礼をしてきた。そして画一化された扉の一つを開け、部屋に入っていく。

私はそれを確認して、自分も職務をこなすための部屋に戻っていった。

『女医も刑事も相変わらずか……』

目の前に整然と並ぶ、何十ものTVモニターを眺めて呟く。モニターに映る一つの部屋では、先程のコートを着た男が、ぶつぶつと独り言を繰り返していた。

その隣の画面では白衣を着た女が、数字の羅列する画面に向かい、せわしなくキーを打ち込んでいる

他のモニターでも、それぞれ質素ながら患者に模した部屋が映っていた。各室内では瞳の奥に虚ろな輝きを隠す人間たちが、舞台役者のように誰かを演じているのだ。

唐突に大気のかたまりが動いた。肩口に押し出された気体の流れを感じて、振り向く。そこには施設の長である初老の院長が、いつの間にか後ろに立っていた。

『これは院長、いつの間に来られたんです？』

私の声を受けても微動だにせず、院長は目を細めてモニターを伺った。気配を感じさせないのは常であったが、声ぐらいかけても良いだろうに、と思わないでもない。

『どうかね、皆の様子は？』

『はい、特に今のところ変化はありません。このまま監視を続けたと思います』

院長の研究では複数の人格を合わせ持つこの心の病いに対し、その人格の職業に合わせた部屋を用意して演じさせることで、達成感から症状が改善に向かうとのことだった。

私の見る限り、現時点で効果は出ていない。だが私の役目は患者

を観察して僅かなことでも報告することであり、その責務に強い誇りと責任を感じてもいる。

『うむ、そのようだの。まだまだ、時間が必要かのう』

自らに語ったようにも見える院長は、白髪が薄く混じり始めた髪を撫でつけた。

『今日はもう少し観察を続けてみます。院長はどうぞ、お休みください』

『ふむ、そうか…… ふむ。君がいると仕事が助かるの。それじゃあ、後は任せたよ』

そう言い残すと院長は扉を後ろ手に閉め、入ってきた時と同じように、音もなく部屋を後にした。

さて、先月に運ばれたきた患者はどんな具合だろうか。私はモニターのスイッチを切り替えようと、装置に腕を伸ばした。

カチャリ。

どこか近くで鍵のかかる音が聞こえた。が、私は変わったモニターに、視点を固定させ続けた。

なんだか少し、頭が痛いような気がする。……疲れているのだろうか。

にわかを訪れた鈍痛と戦う私の瞳に、モニターに映る階下の部屋が飛び込む。ここでは私の部屋と変わらず、静寂の室内を虚構の世界が満たしていた。

私は観る。飽きることなく、真剣に。たとえ痛みが脳内を圧迫し、精神を狂わせたとしても。

何故なら、それが私の職務であり、そのために私は……

……私は存在するのだから

虚ろな瞳（5分、ミステリー）（後書き）

原点は昔姉が書いたショートショートだったりします（笑）

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4442d/>

懐古の扉（超短編集）

2008年8月29日18時20分発行